

作品概要

作品名：里地里山自然資源管理モデル検討調査—SATOYAMA  
イニシアティブの発信にむけて—  
発注：環境省自然環境局自然環境計画課  
事業目的：SATOYAMA イニシアティブの国内外での理解と参加を目指した、自然資源の持続可能な利用・管理の具体的な指針・手引きとして提示すべき技術的な要素を抽出・整理する。  
協働者等：国連大学(国際会議対応等)、(財)自然環境研究センター(海外現地調査)  
事業期間：平成21年9月～平成22年3月  
事業規模：世界各地の二次的自然域

作品評

この作品は2010年に開催された生物多様性条約第10回締約国会議において、議長国のわが国が里山の考え方を取り入れた「SATOYAMA イニシアティブ」を発信するために必要な情報分析と資料作成を目的として、自然資源の持続可能な利用・管理の取組みにおける世界各地の二次的自然の事例を分析し、手法例集としてまとめたものである。  
国内外の膨大な事例を分析して、持続可能な利用・管理に有効と考えられるポイントの抽出から、他の地域への適用が可能である普遍性を有する手法を導き、実施主体別に手法を分類している点や、社会的・経済的な持続性を含めた総合的な視点での分析などは、実情の異なる各国において理解されやすいアウトプットにまとめられている。  
現段階で各国の多くの団体が国際 SATOYAMA パートナーシップに参加表明をしており、今後の展開が期待されるプロジェクトであるところから、本作品の成果がその動機付けを担ったことは賞賛に値するとして、審査員一同から高い評価を得た。

まず、SIの有効性を示すために、SIの考え方に合致する取組みをすでに行っている事例を調査し、SIの考え方に立って事例集をまとめました。事例集の作成にあたっては、できる限り多様な気候帯の事例、途上国の事例、社会・経済的持続性を有する事例といった点に留意しました。この事例群から、自然資源の持続的利用・管理において有効だと考えられ、かつ、他の地域への適用が可能（普遍性を有する）と考えられるポ

イントを抽出・整理することで取組みの技術的指針となるような“手法”を一般化しました。これにより、自然資源を持続的に利用・管理する際に、どの立場の人が何をすることが効果的なのか、ということが明らかになりました。“事例”と“手法”のとりまとめによりSIは具体的な形となり、COP10における決議へと繋がりました。

手法例：「複層的・複合的空間利用の導入による機能的な資源循環システムの確保に関する手法」（概要）		
★手法の内容及び適用可能性		
	垂直方向の複層的な土地利用	水平方向の複合的な土地利用
手法の内容	・樹木を植栽又は樹木を残し、その間で家畜の飼育や農作物の栽培を行う。一つの空間を複層的に利用する土地利用手法。 ・空間を高密度で利用でき、上層の植物が下層部に栄養を供給する等、複層的な物質循環を構築し、総合的な生産性を高める。	・農地、密林地、草地等の異なる土地利用のモザイク状の配置や複数の動物種・成長段階の組み合わせにより、一つの空間を水平方向に複層的に利用する土地利用手法。 ・森林の遊歩等を農地にて利用する等の土地利用間の関係性を構築し、総合的な生産性を高める。
適用範囲	・森林が成立する地域に適用可能性があるが、自然条件により階層の複雑さ、構成する植物、農作物、家畜等は大きく異なる。 ・植物生産量が大きい熱帯地域にくらべ、温帯・乾燥帯等では比較的単純な階層構成となる。	・幅広い地域で適用可能性があるが、気象や地形等の自然条件によって土地利用及び動物種の内容や水平構成の複雑さが大きく異なる
主体	・農林業の経営者	・農林業の経営者
★事例から得られた自然資源の持続可能な管理・利用に關して期待される効用		
自然資源の持続可能な利用・管理に関する効用（社会経済的効用）		二次的自然の健全性に関する効用（生態系及び生物多様性に関する効用）
空間の高密度利用・最適配置 生物種や成長段階の多様化 大面積での資源収奪の停止	▶ 農林畜産物の生産量の向上・安定化 ▶ 複数の供給サービスの並行利用が可能 ▶ 土壌流出抑制等の調整サービス安定化	▶ 過剰利用又は利用不足の緩和 ▶ 農地・森林等の二次的自然の健全性 ▶ 多様な生態学的ニッチ・ハビタット形成
★SATOYAMAイニシアティブの「5つの視点」を踏まえた計画のポイント及び作業例		
5つの視点	計画のポイント	作業項目
環境容量・自然復元力の範囲内での利用	・自然資源の利用・管理に関する現状及び課題を踏まえ、自然資源の利用可能量及び生態系サービスの向上を図る連携事業のための目標を設定することが必要である。	・現状及び課題の整理 ・土地利用の複層化・複合化の目標の設定
自然資源の循環利用	・地域の自然条件や社会経済的条件を踏まえ、機能的な資源循環を構築できる作物や家畜の構成を設定することが必要である。	・作物・家畜の構成の設定
地域の伝統・文化の評価	・伝統的な複層的・複合的土地利用と新たな計画を照らし合わせ、地域の自然条件との調和が取れているかどうかを確認することが必要である。 ・現代の科学技術を融合させることにより、現代の社会経済的条件との調和を図ることが必要である。	・伝統的手法の再評価と計画への反映
多様な主体の参加と協働	・必要に応じて、公的主体や科学者による支援体制や、地域ぐるみの協力体制を構築することが効果的である。	・支援・協力体制の構築
地域社会・経済への貢献	・持続可能な農林水産業の市場形成に向けた社会経済的支援が必要である。 ・的確かつ広範な普及を図るために組織的な教育、人材育成及び能力開発を行うことが必要である。	・社会経済的支援の計画 ・教育・人材育成及び能力開発の計画



# パークシティ浜田山における緑地環境保全

株式会社オオバ

土川 豊, 戸邊真人, 忠岡俊彦(現, 三井不動産株), 湯浅敦司, 望月啓史, 本田美保, 萩野一彦

パークシティ浜田山(以下、PC浜田山)は、三井グループのグラウンド跡地(以下、敷地)における住宅地開発(事業手法は土地区画整理)です。計画地全体は、杉並区における神田川崖線を中心に広がる自然環境の中でも重要な緑地として評価されるものであり、PC浜田山における緑地環境保全は、この重要な緑地の保全と住宅地開発の両立を目的とした一連の調査・計画業務です。

業務は多岐にわたり、コンセプト立案、マスタープラン(基本構想)、敷地計画、自然環境調査、公園設計、植栽設計及び管理計画、規制誘導方策(用途地域、地区計画、建築・緑地協定)、施工中の設計監理までを「保全」理念の下に一貫して行ったものです。

PC浜田山は、2008年12月に土地区画整理事業の終了認可を受け、その後順次集合住宅の販売が進められています。また、西側の樹林地及び南側崖線部は2010年4月より、三井の森公園として開園しています。

なお、既存の緑をまとめて保存した点が高く評価さ

れ、2010年度グッドデザイン賞を受賞しています。

## □土地の記憶の継承と緑の保全

70年の間、豊かな樹木を育ててきた敷地には、庭園のようなグラウンドを目指した先人が大切に育ててきた銘木の数々が点在し、また、敷地西側には豊かな樹林地が、南側には崖線の緑が存在していました。これらの緑はかけがえのない財産であるため極力保全した上で、次世代に引き継いでいくことが望まれていました。

そのため、建物配棟にあたっては既存樹木の位置を踏まえて計画することとし、西側樹林地及び南側崖線を公園とした上で、地区計画では地区施設として歩道状空地を定め、敷地外周部等における、並木の保全空間及び歩行者通路として担保しました。また、自然環境調査に基づく植栽計画や移植の実施、モニタリングに基づく植栽管理などを行い、質的な担保も行いました。

こうして整備された緑は地域に開放され、隣接する区立柏の宮公園の緑との相乗効果もあり、杉並区を目指す「みどりと水の空間軸」の骨格を担うに足る量と

